

グアテマラ高地キチェ・マヤ社会の コフラディアとサン・シモン信仰：スニル村の事例

稲村哲也¹⁾、アラン・ハイメ²⁾、市木尚利³⁾、木村友美⁴⁾

Cofradía and *San Simón* Cult in a Quiche Maya Community of Guatemalan Highlands : The Case of Zunil Village

Tetsuya INAMURA, Alan JAIME, Naotoshi ICHIKI, Yumi KIMURA

要 旨

本稿では、グアテマラ高地のキチェ・マヤのコミュニティの一つであるスニル村において、1974-75年に実施した調査と、2020年2月に実施した短期調査に基づき、そこでのコフラディアの組織・運営とサン（聖）・シモン信仰について述べる。コフラディアは、征服後にスペインから導入されたカトリックの信徒の組織であるが、シンクレティズム（信仰混淆）の例として知られている。サン・シモンは、コフラディアが管理する聖人だが、マヤの信仰を強く受け継いでいる。本稿は、とくにサン・シモンに照準を当て、現代におけるマヤの信仰の特徴とその変化を分析する。

ABSTRACT

This article describes the organization and management of *Cofradía* and the *San Simón* Cult in Zunil, an indigenous Mayan community in Guatemala highland, based on the authors' study conducted in 1974-75 and the short-term survey carried out in February 2020. *Cofradía* is an organization of Catholic congregation introduced by Spain after the Spanish conquest. It is known as an example of syncretism. *San Simón*, a unique saint statue looked after by the *Cofradía* is also an object of the Maya religion. This article focuses on *San Simón* and analyses the characteristics of contemporary Mayan religion and its changes.

1 はじめに：グアテマラ「高地マヤ」 研究の再開

筆者（稲村）は、学生時代の1973年にメキシコに留学してオアハカに滞在したが、留学に続いて、1974～1975年にグアテマラ中西部高地（「高地マヤ」地域）の民族誌的調査を行った。しかし、大学院に進学したあとの1978年にペルー・アンデスでの民族学調査団（増田昭三団長）に参加し、牧畜社会の調査を行い、それ以後はアンデスに加えアジア（ヒマラヤ、モンゴ

ル等）の牧畜社会でも調査を行ってきた。そのため、グアテマラでの研究は中断した。

今回、科学研究費・新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明」(2019～2023年度、研究代表者松本直子)の研究の一環として、グアテマラの「高地マヤ」⁵⁾の文化に関する研究の再開を目標のひとつに定めた。2020年2月下旬～3月上旬にメキシコで開催された科研による国際会議の前に、グアテマラで予備調査を開始する計画を立て、アラン・ハイメ、市木尚利、木村友美の3名と共に約2週間の短期調査を実施した。目的は、グアテマラ中

¹⁾ 放送大学特任教授（「人間と文化」コース）、文化人類学、博物館学

²⁾ 南山大学ほか非常勤講師、文化人類学

³⁾ 立命館大学非常勤講師、アンデス考古学、博物館学

⁴⁾ 大阪大学専任講師、フィールド栄養学

⁵⁾ マヤ語として分類される言語は、大きく3地域に分けられる（以下、小泉1996）。第一は、メキシコ東部のベラクルス州のワステコ語である（ただし、マヤと呼ばれることは少ない）。他の二つが、古典期マヤの中心だったユカタン低地、及び、グアテマラ高地とメキシコ・チアパス地方である。グアテマラとチアパスは、現代マヤの中心地として、言語集団が多数に分化している。グアテマラ高地には、マム系（マムMam、イシルIxil）、キチェ系（キチェ Quiche、カクチケルCakchikel、ケクチKekchなど）等がある。人口ではキチェ（100万人以上）が最も多く、マム（69万人）、カクチケル（40万人）、ケクチ（36万人）と続く。

西部高地の先住民社会を巡り、考古学との連携において重要なマヤの信仰と儀礼の民族誌的調査のめどを立てることであった。

結果的には、大きな幸運にも恵まれ、予備調査の範囲を大きく上回る成果を得ることができた。その成果の一つとして、本稿では、スニル村のコフラディアとサン（聖）・シモン信仰について論じる。コフラディアは、植民地時代にスペインから導入され、独自の発展をしてきた、カトリック聖人像の世話をする信徒組織であり、グアテマラで特に根強く継承されてきた。これは、植民地時代に発展した地方行政の役職と結びつき、「政治宗教階梯制」（または「カルゴ・システム」）として、先住民コミュニティの統合に大きな役割を担ってきたものである。サン・シモン信仰は、そのコフラディアに組み込まれたマヤ儀礼であり、外形はカトリックの聖人信仰の装いを示しながら内実はマヤ伝統の信仰を強く受け継いでいる。

2020年度にグアテマラでの調査を続行する計画を立てたが、COVID-19感染症流行により断念せざるを得なかった。そのため調査は不十分であるが、現時点で報告しておく意義はあると判断した。そこで、本稿では、45年前の調査のデータ（稲村1980）と今回の観察を紹介し、文献を参照して、グアテマラ先住民「高地マヤ」の人々の信仰の特性について論じたい。次章でまずフィールドワークについて述べ、次いで3章でグアテマラ高地とスニル村の概要をまとめておく。4章では、45年前の調査データの一部からコフラディアについて述べ、コフラディアの特徴について論じる。5章では、同じく45年前の調査データから、サン・シモン信仰と儀礼について報告する。6章では、サン・シモン信仰のバリエーションとして、他の地域の事例を簡単に紹介し、比較するとともに、サン・シモン信仰の起源について述べる。7章では、コフラディアとサン・シモン信仰のダイナミズムについて論じる。

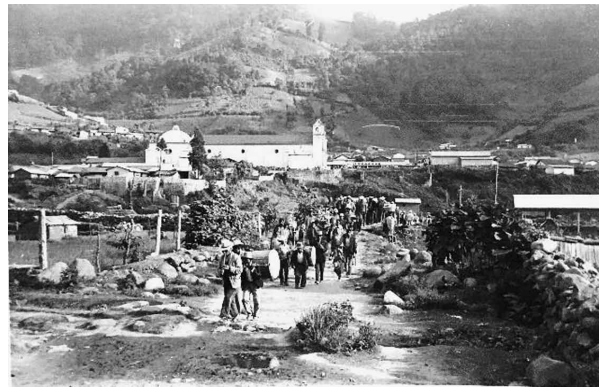
2 フィールドワーク

2-1 45年前のフィールドワーク：スニル村（1974年～1975年）

学生時代、留学先のメキシコ・オアハカ地方からグアテマラに旅をしたとき、筆者は「高地マヤ」と呼ばれる中西部高地の先住民の村々に魅せられた。幼い子供から高齢者までが美しい織の民族衣装を身につけ、しかもその衣装は村ごとに異なっていた⁶⁾。何よりも、先住民が、国の過半数を占めることもあり、堂々と固

有の文化を維持して生活しているという印象を受けた。メキシコがメステイソをマジョリティとする社会であり、先住民が周縁化され、彼ら自身が、貧しさや被差別を意識していることとは正反対の印象であった。グアテマラの人口構成は、先住民が、ラディーノより多く、全体の過半数を占め、中西部高地ではとくに先住民の比率が大きいことがその背景にある⁷⁾。

そこで、いくつかの村々を巡ったあと、スニル（Zunil）というキチエ（Quiché）の村で調査を試みることにした。スニル村は、海拔約2千メートルに位置し、サマラ川の流域に野菜畑がひろがり、その中に白い教会が遠方からも見えた（写真①）。教会の前の広場の周囲には、役所、市場、公民館、診療所などの公共施設が並んでいた。水場では、美しい民族衣装を着た女性たちが、のどかに洗い物をしていた（写真②）。アルカルデ・ムニシパル（村長）に滞在を申し出ると、アルカルデが所有していた空き部屋を貸してく



写真① スニル村の道を進む聖行列（1974年撮影）



写真② 水場で洗い物をする女性たち（1974年撮影）

⁶⁾ マヤ系先住民の衣装については、その技法のすばらしさと共に、それが人々の文化的アイデンティティと強くかかわっていること、さらに、歴史的闘争・政治的抵抗のプロセスにおいては文化的抵抗としての政治的意味をもつこと、などが論じられてきた（小泉1996、本谷2012、佐藤2019、2020）。

⁷⁾ ラディーノは、メキシコでのメステイソにあたる語で、一般にはヨーロッパ系と先住民の混血の意味とされるが、むしろ文化的なカテゴリーである。グアテマラ先住民のほとんどはマヤである。先住民のなかのごく少数の例外として、グアテマラ東南部にシンカ（Xinca）が居住し、人口は約3,500人とされている（以下、小泉1996）。また、約4,500人の非先住民であるガリフナ（Garifuna）が大西洋岸に居住している。彼らはブラック・カリブとも呼ばれ、先住カリブと黒人逃亡奴隷の混血によって生じた独自のエスニック集団である。

れた。そこで、村に数ヶ月間滞在し、主要な祭を観察した。とりわけ、カトリック聖人の信徒組織であるコフラディアとマヤの信仰を色濃く受け継ぐサン・シモン信仰に関心をもって、調査を行った。村人たちはたいへん親切で、調査者を暖かく受け入れてくれた。

2-2 グアテマラ中西部高地とスニル村へ

45年ぶりに訪れたグアテマラ中西部高地の村々は大きく変わっていた。アティトラン湖の湖畔の小さな農漁村だったパナハチェルは、観光リゾートに変貌していた。他の湖岸の村々も、パナハチェルからのポートによる観光のルートになっていた。そこで、私たちは、ポートをチャーターして対岸のサンティアゴ・アティトラン村に向かった。そこで続けられているはずの「マシモン信仰」を見るのが目的であった。

美しい火山の麓にある港に着岸すると、そこには織物などの土産物店が立ち並んでいた。公式のパスをもった観光ガイドが話しかけてきたので、彼の勧めに従ってオート三輪車をチャーターすることにした。運転手に教会とマシモンの場所に案内してくれるようお願いした。

港から急坂の街路をあがっていくと、間もなく教会に着いた。教会の内部には、壁に沿って各コフラディアの聖像がずらっと安置されていた（巻末カラー①）。それだけでも、コフラディアの活動が健在であることが予想された。

次にマシモンの祈禱が行われている場所に案内してもらった。そこはコフラディアの長の家であるが、中央の椅子にマシモンが座り、その前にたくさんのロウソクと香が焚かれ、むせるほどの煙が充満していた。マシモンは、「木製仮面をつけ、藁人形のような胴体にアティトラン地方男性の民族服を着ている像であり、サンタ・クルス（聖十字架）というカトリックの信徒集団（コフラディア）の家に祀られている」（桜井1998：3）⁸⁾。

マシモンは、黒い帽子を被り、肩からから何枚かの女性用スカーフを掛けている。その両脇と周囲にコフラディアのメンバーが座している。マシモンの前は花（造花）で飾られ、その上には沢山の海岸のフルーツが吊り下げられている（写真③）。私たちは、そこにいたチマン（祈禱師、儀礼執行者）に、メンバーの健康と仕事の成功を願う祈禱をお願いした（巻末カラー②）。そして、一連の儀礼を観察し、写真や映像を取らせていただくこともできた。

マシモンは、スニルのサン・シモンとほぼ共通した「聖人」である。「長老、祖父」を意味するマヤ語のマーム（Maam）とシモンが合わさってマシモンとなった、などの説がある。ただ、サン・シモンはサングラスをかけているが、マシモンが通常は仮面を被っている。どちらの場合も、生きてるように付きっきりで



写真③ マシモン像の仮面にタバコを吸わせている

世話をされ、タバコや酒が絶やされない（酒が体内に入る仕掛けになっている）。巡礼者・訪問者の依頼に応じて、チマン（祈禱師）が、マシモンを通じて、神々や精霊たちに呼びかけ、願い事の成就のために祈禱するのである。

この儀礼に参加できたことで、半世紀近い時を経た調査の再開に確信をもつことができた。グアテマラの高地マヤ地域の景観は大きく変貌したけれども、人々のマヤ的精神世界は維持継承されていることがわかったからである。また、このときの祈禱が、その後のいくつもの幸運を呼んでくれたのかもしれない。

ボートでパナハチェルに戻り、翌日は県の中心であるケツアルテナンゴに泊まり、その翌朝、一番の目的地であるスニル村を訪れた。1974～75年の当時は、サマラ川を挟んで一面に野菜畑が広がり、東西の河岸段丘上に日干しレンガと瓦屋根の集落が広がっていた。しかし、45年を経て、スニルの景観は、二階建て、三階建てのビルが立ち並び、街路を自動車が走る「市街地」へと大きく変わっていた（巻末カラー写真③）。村に入ると、まず、大きな市場の建物にぶつかった。以前は市は露天で開かれていたが、大きく立派な市場が建てられていて驚いた（巻末カラー写真④）。昔、親しくしていた（おそらく、その子どもの世代の）人々と再会することは絶望的と思われた。唯一、昔と同じ姿を保っていた教会の前に車を止めた。駐車スペースを管理していた警察官の若者に、昔、家族ぐるみで親しくしていただいたウイチョ氏（当時村役場秘書）の写真を見せたが、知らないという。

高齢の住民を探して、教会前広場で様子をうかがっていると、さきほどの警察官が彼の叔母を連れてきてくれた。マリアさんというその女性は「ウイチョさんは亡くなったけれど、子供たちがいる。3人の息子はそれぞれバスを持っているけど、みなケツアルテナンゴ市に住んでいますよ」と言う。彼女に昔の写真のアルバムを見せると、とても懐かしそうに見入って、彼女の叔父を含む何人もの名前が発せられた（写

⁸⁾ サンティアゴ・アティトランのマシモン信仰については、桜井が1992～93年に現地調査を実施し、詳しい報告が刊行されている（桜井1998）。

真④)。

しばらくして、警察官が「息子のエドウィンが、バスを運転してケツアルテナンゴから到着したよ。もうすぐバスが出るけど、会いたいと言っている」と知らせてくれた。急いで会いに行くと、昔のウイチョさんにそっくりのエドウィンが待っていて、「テツヤ」と呼んでくれた。彼は「いまからケツアルテナンゴ市に行くけど、2時間でもどってくる」と言って、バスを運転して出発していった。

およそ3時間後にエドウィンと再会した。昔、お父さんのウイチョ氏と撮った記念写真と同じように、教会の前でエドウィンと写真をとった(写真⑤、⑥)。ケツアルテナンゴに住んでいるというお母さんに携帯で電話をして、「ママ、いま誰とあっていると思う？あててごらん。~~テツヤだよ~~」と言って、繋いでくれた。エドウィンはちょっと涙ぐんでいた。私のほうも、以前家族ぐるみで親切にしてくれたファミリアを思い出し、「どうしてもっと早く来なかったんだろう」という後悔と再会の喜びとが、心のなかで交錯していた。



写真④ マリアさんに写真を示して、知人を尋ねる



写真⑤ 45年前のウイチョ氏との写真(1975年撮影)

エドウィンは、アルバムの写真にある「サン・シモン」に私が興味を持っていたことを思い出し、現在のサン・シモンの場所に案内してくれた。コフラディアのアルカルデ(長)の家のサロンに着くと、チマン(祈祷師)やコフラディア関係者に紹介してくれた。そこで、「アラン(筆者)の健康と成功を祈願する」儀礼をやってもらいたいとお願いした。

そのチマンに、昔のサン・シモン儀礼の写真を見せた(写真⑦)。すると、驚いたことに、親しかったヘロニモ師の名前を知っていて、「もう亡くなったけれど、いい人だった」と言った。

その後、警察官の叔母のマリアさんは、私たちを、お嫁さんとお孫さんと一緒に、市場での買い物に連れていってくれたあと、夕食に招待してくれた(写真⑧)。息子さんはアメリカに出稼ぎに行っているとのことだった。マリアさんは、「母が亡くなったばかりで悲しいけれど、あなた方が来てくれたのでうれしい」と言ってくれた。街が近代化して昔のスニル村の面影はすっかり無くなってしまったけれど、マヤの住民のみなさんの生活と、やさしい心根は昔のまま続いていた。

2-3 2020年2月のフィールドワーク：サン・シモン信仰への参加

(1) サン・シモン儀礼のプロセスの概要

以下では、筆者(アラン)が受けたサン・シモンの儀礼の概要について紹介する。

<部屋に入る>

コフラディアのアルカルデ(長)の家がサン・シモンの場所である。街路から中に入ると、比較的広いサロンで、左手の奥に、サン・シモンが椅子に座っている。サン・シモンは、スーツにネクタイを締め、ラデ



写真⑥ 息子エドウィン氏との再会(2020年撮影)



写真⑦ ヘロニモ師によるサン・シモンの祈祷
(1974年撮影)



写真⑧ マリアさんは自宅の夕食に招待してくれた。

イーノの恰好をし、サングラスをかけ、帽子をかぶり、黒いマスクで口を覆っている。また、右手に、バラ（杖）を持っている。サン・シモンの両脇と前には花が飾られ、サン・シモンの上にネオンサインのアーチがある。ネオンサインにはコフラディア・サン・シモンの文字があり、ネオンが赤、緑、紫と点滅している。その前のテーブルには、さまざまな色の大小のロウソクが灯されている。

まず、入口の左の木のテーブルに座っているチマンに挨拶をする。チマンは、サン・シモンにどのような願い事をしたのか尋ねる。

信頼の雰囲気をつくりだすように、チマンが訪問者と会話をする。その会話で、チマンは、訪問者のタイプ（外国人、先住民、ラディーノ、農民、都市住民など）について、またどのような願い事かについて、アイデアをつかむ。それによって、願い事に合わせたサービスをする。もっとも共通な願い事は、健康と仕事である。

＜儀礼のプロセス＞

- ・チマンと訪問者が合意すると、訪問者は、アルコール、タバコ、ロウソクなどの供物を買う。供物がなければ、敬意がないとみなされる。それから、訪問者は、祈祷のための金額について了承する。
- ・願い事を効果的にするため、チマンは、ノートに、訪問者のフル・ネームと出身地、国を書き込む。また、訪問者の名前をはっきりと告げる。
- ・チマンは、サン・シモンの2～3メートル前に立つように指示し、自分はその後ろに立つ。スペイン語とキचे語で祈祷が始まる。
- ・チマンは、ロウソクをもち、それで訪問者の頭と肩を軽く叩く。チマンは「アブラ・ラ・プエルタ（入り口を開けてください）」と何度も告げる。
- ・チマンは、聖なる水を植物の房に含ませて、それで頭と上半身、手のひらをたたいて清める（巻末カラー写真⑤）。
- ・チマンは訪問者に十分な信仰と敬意をもって願い事をするように指示する。訪問者は、声に出さずに、心で念じる。
- ・続いて、助手がきて、訪問者に「サン・シモンが少しお酒を飲みたい」と話す。次に蒸留酒の小瓶をもってきて、それをサン・シモンの体の各部に触れさせる。
- ・サン・シモンの口を覆っていた黒いマスクをとり、サン・シモンが坐っている椅子を後ろに傾け、訪問者に口のなかに酒を注ぐように指示する。訪問者は、酒を小さな水差しのような容器に移し、それからサン・シモンの口に酒を注ぐ（巻末カラー⑥）。
- ・チマンがサン・シモンのバラ（杖）を頭の上に旋回させ、十字を切り、それに接吻する。
- ・タバコを加えさせ、それに火をつける。訪問者も煙草をくわえて火をつける。
- ・サン・シモンが通常的位置にもどされ、チマンは訪問者に、サン・シモンの首にさげられた布袋に願い事のための金銭を入れるように促す。
- ・最後に、チマンは感謝の印として、供え物をきちんと受け取ってもらい、訪問者の願い事が叶うように、大きな声で祈祷を行う。

(2) チマンによるサン・シモンに関する語り

サン・シモンは、神聖で特別なエネルギーを持っている。だから、チマンは、健康、金銭、愛情、住居、旅などの問題を抱え、そのエネルギーを必要とする人々に、言葉と祈りでそのエネルギーが伝わるように手伝う。スペイン語を使うほかに、チマンの祈祷の表現はキचे語である。

サン・シモンはとても傷つきやすいが、同時に、マヤ先住民、ラディーノ、外国人など、どのような種類の訪問者も喜んで受け入れる。訪問者は、近隣の村々、グアテマラ市、メキシコ、アメリカ、ヨーロッパなど、世界の多くの場所からの人々である。訪問者が何か願い事をしたい場合、訪問者はそのフル・ネーム

をチマンに告げる。チマンが供物をサン・シモンに捧げた後、チマンの言葉によって、サン・シモンは、訪問者の名前とその願い事を聞く。

サン・シモンは酒、タバコ、お金の協力を受けるのが好きである。チマンたちは、訪問者たちのお供え物を適切に管理する。チマンは、健康であろうとなかろうと、酔っぱらっていきようがまいが、悲しかろうが満足していきようが、サン・シモンのかたわらに居て、ロウソク、香、酒、タバコ、清掃など、サン・シモンに仕え、訪問者の依頼に応じる。

コフラディアによって準備された部屋にはいる時には、常に、サン・シモンとチマンへの敬意を示さなければならない。コフラディアは小さな店をもっているため、サン・シモンが彼らの願い事を聞く準備ができるよう、訪問者は直接そこで酒やタバコの供物を購入することができる。

チマンによる祈祷と願い事後、訪問者は、その場に好きだけ留まり、コフラディアのメンバーとより信頼して会話をすることができる。チマンたちは万人に開かれており、喜んで願いや悩みを共有し、友人になることもある。

チマンが繰り返す重要なことは、すべてがサン・シモンとチマンに依存するのではない、ということである。訪問者が正直にサン・シモンを信じ、信仰をもつことによってのみ、願い事は現実のものとなる。この信仰の強さのため、訪問者は願い事が叶うのを見て、(どの場所からであっても)訪問者はサン・シモンのもとに戻ってくる。だから、とぎれることなく、信者がサン・シモンの部屋を訪問する。サン・シモンの加護には国境はない。

3 調査地「高地マヤ」とスニルの概要

3-1 グアテマラ中西部高地の概要⁹⁾

現在のグアテマラ共和国の人口は1,725万人(2018年)であり、国土には多様な自然環境があるが、自然地理的に大きく二分されている。グアテマラ北部は、メキシコのユカタン半島とベリーズに続く低地である。一方、グアテマラの中央と南部は、中央アメリカ火山帯の一部をなす山岳高原地帯であり、気候は亜熱帯性の地域でありながら標高が1,500m以上となるため冷涼で温帯性の気候となっている。それはメキシコ南部からコスタリカまで続く高地である。グアテマラには35以上の火山があり、最も高いタフムルコ火山(Volcano Tajumulco)は標高4,221メートルに及ぶ。この火山地帯の中心に位置することには困難もあるが、火山のおかげで、グアテマラは豊かな土壌に恵ま

れている。農業活動がこの国の主な生業と収入源であり、2006年には、GDPの4分の1、輸出の3分の2が農業によるものであった。

農業は、山岳高原地帯の農民・先住民が担ってきたトウモロコシ栽培を主体とする小規模農業と輸出用商品作物を大農園で栽培するプランテーション農業に大別できる。プランテーション作物としては、コーヒー、バナナ、サトウキビ、綿花などがある。1870年代からのコーヒー農園開発ブームを契機に、ラディーノやドイツ系農園主、あるいはバナナのユナイテッド・フルーツに代表される外国企業などによる農地独占が進められた。大農園を解体し小規模農を育成する土地改革をもくろんだアルベンス政権が米国の武力介入で崩壊したため、大農園の農地独占は現在も変わらず、農耕地の60%に及んでいる。

先住民による自給自足的農業は、トウモロコシ、フリホル豆、(外来の)コムギ、野菜などが中心である。Whettenらの調査(1943~44年)では、先住民の穀類からの摂取の98%はトウモロコシであり、ラディーノも95%はトウモロコシ摂取であった(Whetten 1961)。一方で、その後の1950年の統計資料によると、小麦粉のパンを食べることがある(週3、4回)と答えたのは24.7%(先住民16%、ラディーノ39.3%)であったと報告されており、都市部で小麦食が増えている様子が見て取れる。しかしながら、トウモロコシにコムギが取って代わることはなく、現在もトウモロコシが最も重要な食料である。

2018年の穀類からのカロリー供給量のうち、76.6%はトウモロコシである。トウモロコシの食べ方のなかで最も代表的なものはトルティージャ、続いてタマルである¹⁰⁾。「アトル」という粥状のとろみのあるスープ(飲み物)もある。カロリー供給量のうち小麦粉は19.3%で、パンやクッキー、パスタ等麺類として消費されている。

3-2 半世紀間の変化—内戦とその後¹¹⁾

グアテマラの近年の歴史をたどるとき、第一に挙げられるのが内戦である。それは、アルベンス(Arbenz)が大統領に選出された1954年、農地改革実施の直後に始まった。農地改革は米国のビジネス、とくにユナイテッド・フルーツ・カンパニーに多くの悪影響をもたらした。米国の利益の悪化を防ぐために、CIAが反政府勢力を支援し、クーデターを成功させ、それが30年間の軍事統治の先駆けとなった。そして、1970年代の初頭、高地で多くのゲリラ集団が、増大する軍の残虐行為に対抗するために結成された。36年間の紛争で、20万人以上の犠牲者を出し、無数の負傷者、難民を生

⁹⁾ Smith 2006、Instituto Nacional de Estadística 2018、小林2018による。

¹⁰⁾ トルティージャの作り方は以下の通り：①前日からトウモロコシを用意。粒を外して、ライム水でゆで、一晩おいておく。②翌朝、ライム水を流して、石臼で挽く。③ひかれたペースト状のトウモロコシを薄いパンケーキの形にする。④コマル(comal)と呼ばれる素焼きの平らな土器で焼く。一日分を一気に焼く。また、タマルは、ペースト状のトウモロコシをトウモロコシの殻などで包んで蒸したものである。

¹¹⁾ 歴史的記憶回復プロジェクト(編)2000、Smith 2006、池田2020を参照

み、多くの村々を焼き尽くした。国連主導で、左翼ゲリラ組織とグアテマラ政府の間で和平合意が成立したのは1996年のことである。

内戦はグアテマラの土地の隅々までに及んだが、最も激しい戦闘は高地マヤ地域の村々で起こった。犠牲者の83%がマヤ先住民で、46%がキチェ県に集中した。なぜ、マヤ民族に対する徹底的な破壊行為が行われたのか。グアテマラの政治経済エリートは、コーヒーやバナナなどの大農園に寄生してきた。「彼ら支配層が、先住民民族に対し、蔑視とともに恐怖心を抱き続けてきたことは疑いない。全農地の三分の二を占有し、劣悪な労働条件で多くの季節労働者を雇用する大地主層にとって、共産主義ゲリラが先住民の居住地域に浸透し、組織化をはじめたという知らせは、確かに悪夢の到来であっただろう。だが、皆殺しは経済的にみても理に合わない行為である。唯一の公用語であるスペイン語を母語とせず、共同体をベースに先祖代々の習俗や慣習を受け継ぐ」先住民が過半数を占める国にあって「文化と言語の断絶に発するコミュニケーションの不能が、先住民の非人格化と虐殺を容易にしたのかもしれない。もっとも徹底的な破壊を被ったキチェ県イシル地域は、同時に先住民が最も強固に固有の文化を維持してきたところである」（歴史的記憶の回復プロジェクト編2000：18）という。

池田光穂は、住民の証言により、地域社会における内戦時の暴力、拷問と殺戮の具体像について明らかにしている（以下、池田2020）。政府軍だけでなく、革命勢力も幹部はラディーノを中心に構成されていた。革命勢力は先住民を被抑圧階級であり革命の担い手と位置づけ、「土地をすべての人に解放する」というメッセージにより、先住民がゲリラ兵として組織された。国軍によってゲリラが一掃されると、軍隊は、恐怖によってコミュニティを支配した。

3-3 スニル村の概要¹²⁾

スニルはケツアルテナンゴ県に位置し、首都グアテマラ・シティーからは約217kmの地点となる。この一帯には先スペイン期から人々が住み、スニルという地名はキチェ語のTzu（土のコップ）とn'il（音、音楽）の二語が組み合わさってできたものと言われている。1886年にスペイン人たちによって、サンタ・カタリナ・デ・スニルとして町が設定された。

標高3,542mのスニル火山をはじめ、火山が連なる山岳地帯であり、スニルとその周囲は標高1,500mから2,400mに位置している。山岳高原地帯にあり冷涼な気候で明瞭に雨季と乾季がわかれている。

45年前、サマラ川が村を貫き、その河岸段丘を利用した小規模な灌漑によって、主にタマネギ、ニンジンなどの野菜が栽培され、ケツアルテナンゴ市や海岸地方にまで出荷されてきた。住民の大部分は農業に従事し、野菜のほかトウモロコシ、フリホル豆等が周辺の

候斜地を利用して栽培されてきた。

<人口・民族構成>

スニルの人口は、1975年当時は約6,000人であった。先住民はキチェ語が母語であるが、約半数は公用語のスペイン語もある程度話せた。ラディーノは6～7家族だけで、互いに親戚・姻戚関係にあった。

現在の人口は14,118人である。1994年の国勢調査では10,106人であり、全体としては人口が40%ほど増加している。

マヤ系先住民（キチェ）が全人口の約83%を占めている。マヤ系先住民の人口は増加傾向が指摘されている。その次に占めるのはラディーノであり、2,355人で16%である。そのほかは、ガリフナ、外国人、シンカなどで、0.2%ほどである。

<文化・産業>

グアテマラ全体ではプロテスタントが全人口の40%を占めると言われているが、現在のスニル全体ではカトリック信者は75%、プロテスタントは21%、そしてマヤの宗教は4%ほどとされている。しかしながら、村の人口の80%以上を占めるマヤの先住民たちは、現在でもマヤの伝統的な信仰儀礼をキリスト教と融合させた形で実践し継承している。毎年10月28日はサン・シモンを祝う儀礼が行われ、11月1日には別のコフラディアの信者の家へ移される習慣が現在でも受け継がれている。

現在、アルファベットが読めない人口が全体の約40%と高く、現在でも識字率は伸び悩んでいる。グアテマラ全体でも15歳以上の人の12%が、字が書けなかったり、読めなかったりする現状が報告されているが、スニルのような地域単位で見るとさらに識字率の低さが考えられる（Esquivel 2018）。

スニルの土地利用では、農地が75%となり、農業が主要産業である。主な作物はタマネギ、ダイコン、ニンジン、レタス、キャベツである。コーヒー豆の生産も行われているが、国際的な取引価格の下落に影響を受けてしまうため非常に限られている。

1990年代半ばから、農地そのものは減少している。その背景には、就職、進学やより快適な生活を求めて都市部への人口流出があると考えられている。集落内には零細企業としてサービス業や商業に従事する人々は30%ほどを占めている。現在は道路網の整備もあり交通機関や物流を生業とする人々もいる。

4 スニル村のコフラディア：1974～1975年の調査から

4-1 スニル村のコフラディアとカルゴ

(1) コフラディアの組織と儀礼

コフラディアの役割は、担当の聖人の祭を実行することである（以下、稲村1980）。日常的な義務としては、ミサへの出席、祭壇の管理、聖行列と儀式への

¹²⁾ Larez 2008、Instituto Nacional de Estadística 2018を参照。

参加などがある。スニル村には、以下の8つのコフラディアがあった。

- ①カンデラリア Candelaria 聖燭祭（2月2日）
- ②サンタ・クルス Santa Cruz 聖週間（移動祝日）、聖十字架（5月3日）
- ③コルプス Corpus キリスト聖体（移動祝日：復活祭から60日目の木曜日）
- ④サン・アントニオ Sam Antonio 聖アントニオ（6月13日）
- ⑤マリア・ナティビダ Maria Natividad 誕生の聖母（9月8日）
- ⑥ラス・アニマス Las Animas アニマス（10月28日）、万聖節（11月1日）
- ⑦サンタ・カタリーナ Santa Catalina 聖カタリーナ（11月25日）
- ⑧コンセプション Concepción 聖母受胎（12月8日）

コフラディアの成員は、サンタ（聖）・カタリーナのコフラディアは21人、その他のコフラディアは10数人であった。コフラディアのカルゴ（役職）は、サンタ・カタリーナを例にとると、以下のとおりである。

アルカルデ

第1～第4 マジョルドモ

第1～第4 アジュダンテ

第1～第12 コラボラドール

成員の任期は、アニマス（練獄の靈魂）のコフラディアは1年、その他は明確な任期はなく、2年から最長で8年まで続いたことがある。

以下では、コフラディアによる聖行列のプロセスについて述べる。なお、1974年の事例であるが、現在形で記述する。

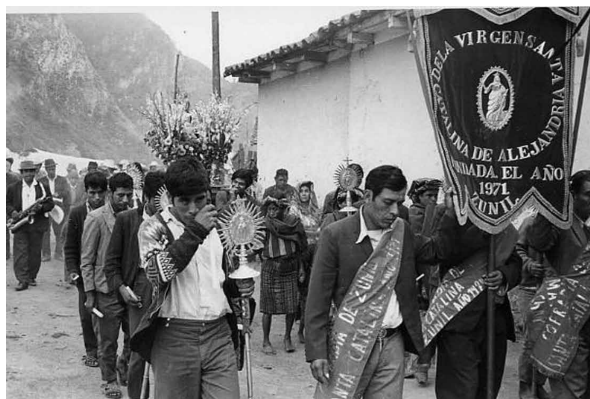
各聖人の祝日には、教会に安置されている聖像が取り出される（写真⑨）。聖像は神輿に載せられ、教会からコフラディアのアルカルデの家まで聖行列が行わ

れる。その列は、トゥン（太鼓）、チリミヤ（笛）を先頭に、各コフラディアの成員2名が紋章を持って並ぶ（写真⑩、⑪）。次いで、聖像の御輿、ブラス・バンドの楽団、村長以下行政役人、コフラディアの他の成員が続き、香炉を持った女たちが列を両側から囲むようにして進む（写真⑫）。

聖行列がコフラディアのアルカルデの家に着くと、聖像の前に置かれた一対の長テーブルに、村長以下の



写真⑩ トゥン（太鼓）とチリミヤ（笛）の奏者が聖行列を先導する（1974年撮影）



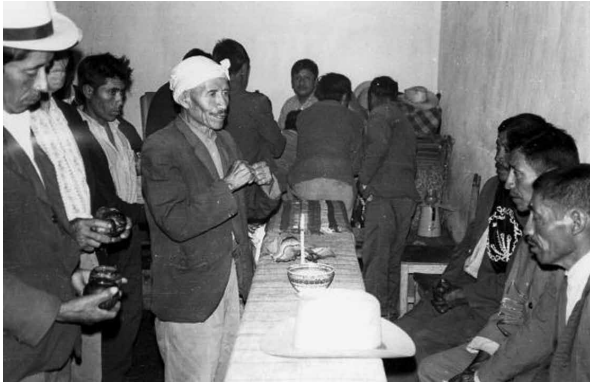
写真⑪ 聖行列で掲げられるコフラディアの紋章（1974年撮影）



写真⑨ 教会の祭壇から降ろされる守護聖女カタリーナ（1974年撮影）



写真⑫ コフラディアの聖行列で香をもって進む女性たち（1974年撮影）



写真⑬ トルトゥレーロ（最長老）による挨拶に続き、アトレなどが振舞われる（1974年撮影）

役人の一団と各コフラディアのアルカルデ（またはその代理）の一団が対座し、トルトゥレーロ（最長老）が儀礼的挨拶をした後、祭の主催者であるコフラディアの会員によって、アトレ（トウモロコシの飲物）、チョコレート（カカオの飲物）、コーヒー、酒、パン、葉巻などが振舞われる。この際、トルトゥレーロは、常に主催者の代表としての役を務める（写真⑬）。彼と客人たちの中で儀礼的な対話がかかわされ、先祖からの習慣に対する尊重の念が、互いに確認される。

(2) 政治的カルゴとその役割

コフラディアのカルゴと政治的なカルゴ（役職）が「カルゴ・システム」（政治宗教階梯制）を構成している¹³⁾。アルカルデ・ムニシパル（村長）以下の上位の6人の役人は、地位の象徴である杖を携帯し、聖行列や儀式に参加する（写真⑭）。その構成は以下の通りである。

アルカルデ・ムニシパル：行政の最高責任者、判事
シンディコ：土地登記書その他の文書を管理



写真⑭ コフラディアのメンバーたちと村長（左から3番目）、及び秘書（前列右から3人目）

第1～第4レヒドール：議員・村長を補佐
39人のアルグアシル：下吏・警吏

アルグアシルは、3つの組に分かれ、交替で職務につく。公務中は広場の詰め所待機し、上役人の命令に従って、警察、使い、清掃などの雑用を行う。3つの組に分かれ、交替で公務につく。

カルゴ以外の行政役人として、秘書と会計はラディーノ住民が雇用され、月給80-90ケツアル（USドルと等価）を受ける。カルゴとしては、村長だけが月額約40ケツアルの報酬を受けるが、他はすべて無報酬である。

4-2 アニマスのコフラディア

(1) アニマスのコフラディアの概要

アニマスのコフラディアの活動の原則は他のコフラディアと同じであるが、性格の全く異なる2つの聖人像を持っているため、他のコフラディアと非常に異なる側面も持っている（以下、稲村1980）。

「アニマスの主」の聖像は「受難のキリスト」像で、「正統」カトリックの聖像である。聖行列に参加するのは常にこの聖像で、サン・シモンの像が公衆の面前にさらされることはない。コフラディア会員の交替に際し、サン・シモンが新アルカルデの家へ移動される場合でも、聖行列の列の中にマイクロバスが入り、サン・シモンはシートに包まれ、そのバスに乗せられて運ばれる。

巡礼者・依頼者がサン・シモンのもとに来ると、チマンに儀礼を依頼する。彼は、ロウソク、タバコ、香、などの材料費を含めて4ケツアル（＝USドル）をチマンに支払い、サン・シモンへの布施として、別に30セントポ（＝USセント）をコフラディアに支払う。チマンは、サン・シモンを通じて様々な精霊にはたらきかけ、商売繁盛、開運、病気治療、対人・男女問題の解決など、巡礼者の個人的な現世利益的な願いを訴える。

サン・シモンの布施は、年間で2,000ケツアル以上にのぼる。これはコフラディアの収入となり、偶像の管理や祭のために支出される。現金以外にも、衣類、酒、タバコ等の多くの供物が贈られる。このため、サン・シモンは、ベッドや、中身の詰まった2つのタンズさえ持っている。

(2) アニマスの祭（サン・シモンの祭）

11月1日の新旧メンバー交替を含め、10月28日から11月3日まで実施される。ただし、11月2日<死者の日>は日程的に重なるが、各家庭の祭壇と、墓地で家族単位の礼拝が行われる。

アニマスのコフラディアは、サン・シモンの祈禱に

¹³⁾ 1945年発布の憲法で、行政役人は住民の間で直接選挙によって選ばれることが規定された。ただし、実際の運用は村人の合意によって選ばれていた。

よる収入が多いので人気が高いため、毎年、コフラディアのメンバーが総入れ替えとなる。そこで、この祝日のプロセスは次のようなプロセスとなる。

- ①現コフラディアのアルカルデの家での宴
(10月28日)
- ②チマンによるサン・シモンの儀礼(祈祷)
(10月29～31日)
- ③「アニマスの主」(受難のキリスト像)の聖行列
(教会～現アルカルデの家：交替式～サン・シモン像の移動～新アルカルデの家～教会)(11月1日)
- ④「アニマスの主」の聖行列(教会～村内～教会)及び新アルカルデの家での宴(11月3日)

以下は、その具体的な内容である。

10月28日

夕刻より、アニマスのコフラディアのアルカルデの家で宴が張られる。家に入ると、左側の中央に椅子があり、その上に黒い仮面が置かれている(図1)。その左側にベッドがあり、サン・シモンがシーツに包まれ寝かされている。仮面の右側には、コフラディアのメンバーが陣取っている。メンバーの妻たちは、ベッドの周囲に座り、サン・シモンの世話をしている¹⁴⁾。仮面の周囲にはアーチが設けられ、オレンジ、カカオなどの果実や植物で飾りつけられている。部屋の右側の奥では、マリンバが演奏されている。部屋の中は、老若男女の熱気で満ちている。ラディーノの若者はモダンなステップを踏み、先住民は、普通、男同士また

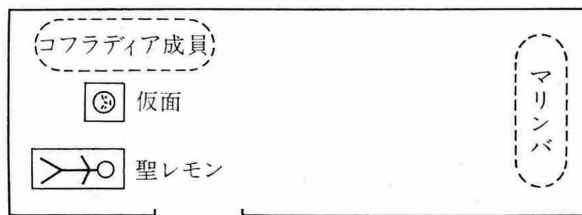


図1 コフラディアのアルカルデの家の宴会場の配置(稲村1980より)

は女同士のペアで、伝統的なソンのリズムに合わせて踊る。部屋の右半分を見るとごく普通のフィエスタのようであるが、左を見ると、仮面の前の床一面にロウソクが立てられている。

ベッドに寝かされたサン・シモンは、時々起こされ、村人がシーツに包まれたサン・シモンを肩にかついで踊る。サン・シモンは、曲が終わると再びベッドに寝かされる。サン・シモンと踊るためには、村人は、コフラディアに50セントボを支払う。

10月29、30、31日

特別な行事はないが、サン・シモンは椅子に座り、チマンによる儀礼が盛んに行われる(写真15)。

11月1日

アニマスの主の聖像(受難のキリスト像)を伴う聖行列が教会を出発し、アニマスのコフラディアのアルカルデの家に向かう。家に到着すると聖像が中に入れられ、行政府役人と各コフラディアの代表者が中に招かれ、長テーブルにつく。

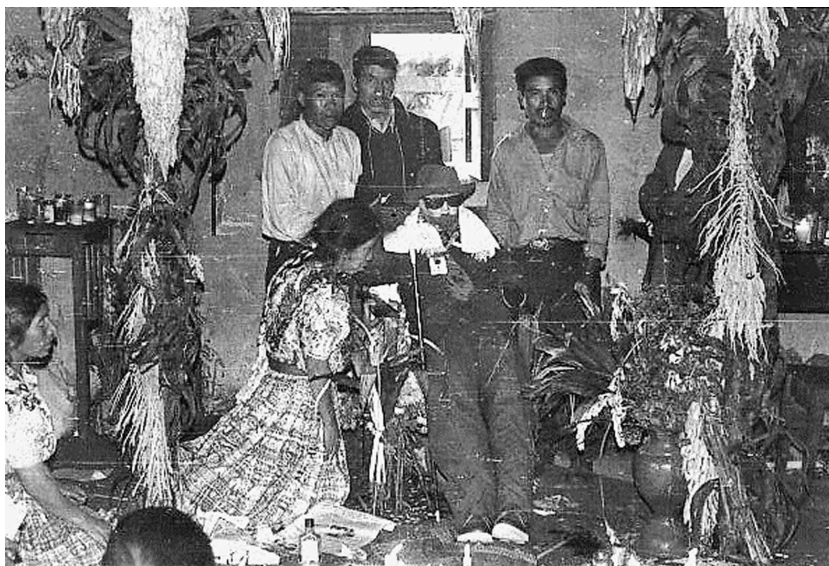


写真15 アニマスのコフラディアのアルカルデの家でのサン・シモンへの儀礼(祈祷)(1974年撮影)

¹⁴⁾ サン・シモンは、全く生きた人間のように扱われる。ある時、筆者がコフラディアのメンバーにサン・シモンの写真を撮ってもよいかと尋ねると、「サン・シモンは今休んでいるからもう少し待て」と言われた。

トルトウレーロ（最長老）の挨拶で始まる型どおりの儀式とアトレやパンの振舞いの後、現コフラディアのメンバーによる会計と財産目録の報告が行われる。

新メンバーと列席者一同が承認すると、村長、会計、秘書が書類に署名し、残金、財産目録、紋章などの引継ぎが行われる。

交替式が終わると、トラックにサン・シモンの全財産（ベッド、たんす、机、椅子）と大きな黒い十字架が積み込まれる。続いて、シーツに包まれたサン・シモンがかつぎ出され、マイクロバスに乗せられる。

トラックとマイクロバスを伴った聖行列は、ゆっくりと新アルカルデの家に向かう。目的地に着くと、役人とコフラディアの代表たちが招かれ、再び儀礼が継続される。部屋の奥にマリンバとプラス・バンドの楽団が陣取り、コフラディアの一員がサン・シモンをかついで入ると、演奏が始まる。彼はサン・シモンをかついだまま数曲踊る。その後、サン・シモンは椅子に座り、酒とタバコが捧げられる。この後、村長と各コフラディアのアルカルデたちがソンのリズムで踊る。サン・シモンの移動はこれで完了し、この後は一般の住民が参加して、宴は夜遅くまで続く。

11月3日

アニマスの主の聖像を伴う聖行列が行なわれる。この日は、教会を出て村内を巡った後教会に戻る。この後、新アルカルデの家で宴が張られる。サン・シモンは椅子に座り、酒とタバコが与えられる。この後、村長と各コフラディアのアルカルデたちがソンを踊る。サン・シモンの移動はこれで完了し、この後は一般の住民が参加して、宴は夜遅くまで続く。

5 スニル村のサン・シモン信仰：1974～1975年の調査から

5-1 サン・シモン儀礼のチマン（儀礼執行者）

サン・シモンの儀礼にたずさわるチマンのヘロニモ・ペレス師は、近隣の村の住人で、バスでスニルに通っていた。彼は、当時49才で、小さな雑貨店と床屋を持っていた。約20年前からチマンとして仕事（祈祷）を始めた。外見からは他の住民と全く区別がつかない。彼の家も、他の家庭と全く変わらず、祭壇にカトリックの小聖像や聖画が置かれている。異なるのは、そこに特別な形の十字架と小さな布が置かれていることである。十字架は約20cmの高さで、輪はムンド（世界）を表わし、Y字形の突起は四方向を表わすという。布袋には赤いフリホル豆と水晶片がはいっていて、占いに使われる。この十字架と布袋は、20年前、ヘロニモ師が彼の先生に付いて260日間の修業を終え、一人前のチマンになった時、先生から授けられたものである。

ヘロニモ氏によれば、チマンたちの間には特別な組織や集団はなく、チマンなるためには、経験豊かなチマンに弟子入りし、彼について歩き、マヤ暦の一年に

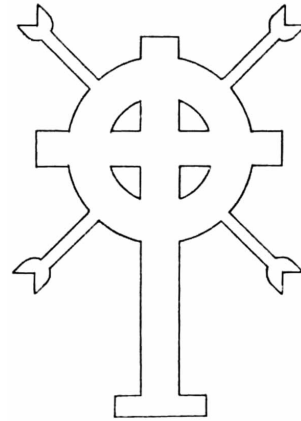


図2 チマンのもつ十字架：マヤ世界観とキリスト教の融合（稲村 1980 より）

あたる260日間訓練する。ヘロニモ氏によれば、チマンになる資格を有するのは、マヤ暦の8、10、13の日に生まれた者である。

5-2 サン・シモンの儀礼

サン・シモンと同様の性格の偶像は各地に存在する。ヘロニモ氏はおもにスニルで仕事をしてしたが、他の場所の偶像や、山や洞窟の聖所や、個人の家に呼ばれて祈祷と占いをすることもあった。巡礼者・依頼者たちは、個人的な現世的な願い事を持ってやって来る。彼らは先住民とは限らず、ラディーノも多い。

儀礼は約1時間半かかる。まず家の中に座しているサン・シモンの前で行われた後、庭の香を焚く場所で行われ、最後にサン・シモンに別れを告げて完了する。

儀礼はサン・シモンの前にロウソクを立てることから始められる。チマンは、巡礼者の名前と願い事をサン・シモンに伝え、「サン・シモンとユダへの祈り」をキチェ語で唱える。続いて、巡礼者は、サン・シモンの脇に寄り、サン・シモンの手足に接吻するなどして、信仰と願いを表現する。サン・シモンは生きた人間のように扱われ、話しかけられる。口に酒が注がれ、タバコはサン・シモンの口から絶やされない。

サン・シモンに対する儀礼が済むと、次に、野外で香を焚く儀礼が行われる。ここでは、巡礼者は見ているだけである。チマンは、まず地面の供物台に砂糖で十字架を描き、その上に、各種の香、チョコレート（カカオから作られる飲料の原料となる固形物）、ロウソクなどを並べ、火を焚く。煙のたちのぼる前で、チマンはまず、キリストと諸聖人の名を連呼する。続いて、諸々のエンカント（祈りの言葉）と20の日の名称を連呼する。約40分で炎が尽きると儀礼は終了し、チマンと巡礼者は再び屋内に入り、サン・シモンに別れの挨拶をして儀礼は終了する。

5-3 シンクレティズムとマヤ暦

サン・シモン儀礼において、チマンは、キリストと

カトリック諸聖者、「～ムンド」と呼ばれる諸々の精霊、20の日の名称に呼びかける。彼らにとっては、カトリックの聖人と土俗の神性は互いに矛盾するものではない。また、精霊の中には、「プレシデンテ・ムンド（大統領の精霊）」、「アボガード・ムンド（弁護士 of the 精霊）」、「パラシオ・ムンド（政庁の精霊）」や、「クルス・ミラグロ・ムンド（奇跡の十字架の精霊）」、「カルバリオ・ムンド（受難の丘の精霊）」、「クリスト・ムンド（キリストの精霊）」等のスペインやキリスト教由来の要素も含まれている。

マヤ暦は、1から13までの数と20の日の名称を組み合わせた260日を周期とするマヤ古代の暦である。チマンたちは、現在もこの暦にもとづいて儀礼や占いをやっている。20の暦日は一般にナワル (nahual) と呼ばれるが、ヘロニモ師は、「イロ」(糸) と呼んでいた。暦日はそれぞれ、名前と意味、異なる性格をもっている。以下は、ヘロニモ師による20の暦日の名称と性格である。

ノッフ	審判の才	健康、仕事、学問、すべてに良い
ティハッシュ カウック	食料と火打ち石 シンボル	女、関係 女、女に関する質問
アフプー	吹き矢使い	頭の混乱 家庭の混乱 物事の混乱
イモッシュ イク	なべ 月	同上 紛争
アカバル	夜と暗黒	悪い影響
クアト	網	裁判
カン	蛇	同上
ケメ	死人	病気、失敗、障がい
キエフ	鹿	男、力、保護
カニル	成熟	収穫、穀物
トフ	雨	仕事
ツイ	犬	敵、うわさ
バツ	猿 (糸)	幸運
エ	歯	仕事、商売、収穫、良い生活
アフ	トウモロコシ(葦)	同上
イシュ	なんじら	仕事・収穫
ツイキン	鳥	金
アフマック	罪人	アニマスの日

チチカステナンゴ (Chichicastenango) における Bunzel (1952) の聞き取りでは、カッコ内に表記たように、バツが「糸」、アフが「葦」となっていた (本誌別稿を参照)。また、トトニカパン (Totonicapan) での実松克義 (2000) による聞き取りによる暦日の内容も一部異なっている。

サン・シモンの儀礼において、すべての暦日が呼び出されるが、儀礼を行う日の性格が、儀礼自体にも影響を与える。例えば、アフマックの日はあらゆる儀礼が行われるべき日であり、カン、またはクアトの日は紛争解決のための儀礼に適する。フリホル豆と水晶片を使って行われる占いも、暦日の性格によって占われる。

6 サン・シモン信仰とその起源

6-1 サン・シモン信仰のバリエーション

サン・シモン (及びマシモン) の儀礼が行われる地域は、スニルのほかに、サンティアゴ・アティトラン、サン・ルーカス (San Lucas)、パツウン (Patzun)、ナワラ (Nahuala)、サン・アドレス・イツァパ (San Andrés de Itzapa) などがある。以下では、桜井 (1998、2018) の報告に基づいて、2つの事例を記述する。

首都から近いチマルテナンゴ県に位置するサン・アドレス・イツァパ村のサン・シモンは、軍服姿のマネキン人形のような姿をしている。サン・シモン像が軍服姿の理由は、アヌエル・アラーナ将軍が大統領選で勝ち、選挙の前からの「約束」として、軍服をサン・シモン像に寄進したからだという。伝承によれば、いつごろからか、ある男が自宅入り口にラディーノ風の服装を身につけたユダの人形を置き、聖週間が終わると天井裏にゴザで包み保管した。やがてこの男が死ぬと、新しい所有者が仮面をツイテの木で作らせ、着席姿勢ができるように膝に細工をした。その後、この像をめぐって奇蹟が語られると参拝者が多く訪れ、1940年代には有名になった。

サンティアゴ・アティトランのマシモンは、聖十字架のコフラディアが守っている。マシモンに似た小型の「マリア・カステリヤナ」像を「妻」として持っていることも特徴である。マシモンは木の仮面と組み立て式の胴体で構成されている。聖週間に一連の重要な儀礼が行われる。聖習慣8日間の中で、聖月曜日から5日間が中心となる。聖月曜日に聖十字架コフラディアの役職者たちによってマシモンが解体され、マシモンは網袋の「包み」状となる。夜間にアティトラン湖畔の秘密の場所で、男性役職者によってマシモン像の衣類が洗われる (女性たちによる昼間の洗濯とは逆の行為)。聖火曜日には、コフラディア宅の暗闇の中で、マシモンはキリストの復活を倣うかのように、組立・構成 (復活) される。聖水曜日、村役場へと向かうマシモン行列が行われ、マヤの祖先神マームの蘇りを喜び、村人あげて沸き立つような祝祭となる。聖木曜日にはマシモンの祖形とも考えられる「包み状」のサン・マルティンの儀礼が聖フアンのコフラディアで行われる。聖金曜日には「寝棺のキリスト」の聖行列を、一足先に「復活」したマシモン像が出し抜く形で追い抜き疾走する。

桜井は、一連の聖週間の儀礼から、マシモン信仰

が、マヤの祖先神とかかわり、「死と再生」のプロセスであることを強調する。

以上のように、サン・シモンにはバリエーションがある。外見に関しては、マシモンが仮面と組み立て式の胴体に民族衣装を身につけているのに対し、サンアンドレス・イツァパ村のサン・シモンは軍服姿であり、スニルの場合は背広を来て、サングラスをかけている。後の二者がよりラディーノ的な外見であるが、マシモンもカウボーイ・ハットを被り、スカーフを掛けるなど、ラディーノ的な要素も強い。

桜井は、各地のサン・シモン信仰を比較し、「サンティアゴ村とサンホルヘ村では先住民が主で、スニル村では参拝者がラディーノおよび先住民で宗教職能者はラディーノである。イツァパ村では両者ともにラディーノが主体である。」(桜井2018・279)とする。しかし、スニルのチマンは、45年前も現在も先住民であるし、先住民とラディーノの明確な区分は、サン・シモン信仰においては、妥当とは言えない。

6-2 サン・シモン信仰の起源について

マシモンは、現在は常に仮面をつけた全身像で登場しているが、以前は、通常は「包み」に入れられ、聖週間などの祭りの時に、特別に構成されて(組み立てられて)いたという(桜井1998)。桜井は、「包み」に注目し、マシモンの起源をマヤ神話「ポポル・ブフ」に結び付け、神官が権威の徴として守っていた「包み」に求めている(桜井2018)。イツァパ村の伝承でも「包み」が登場する。スニルにおいても、サン・シモンの移動の時には、シートに包まれて移動する。確かに、「包み」はサン・シモン(マシモン)の共通の要素のようである。

一方で、サン・シモンの直接的な起源としては、キリストを裏切った使徒ユダとの関係も指摘される。

サンアンドレス・イツァパのサン・シモンとユダとの関係を先に述べたが、スニルのサン・シモンもユダとの関係が強い。サン・シモン自身はラディーノの姿をしているが、分身として木製の黒い仮面(ユダの仮面)をもっている。聖週間の際に、教会の前の広場の特設の舞台上でキリストの生涯の劇が演じられるが、その最後に仮面をつけたユダが首を吊った姿で表される。

マシモン(サン・シモン)の起源についてSmithの論は興味い(以下、Smith 2006)。コロンブス以前の神マーム(Maam祖父)は、マヤの地下世界で強力な神だった。植民地時代のカトリック教会は、先住民に改宗を促すため、マームやほかのマヤの神々を利用しようとした。マームに関しては、その強い信仰に懸念を示し、彼をイスカリオテのユダ(Judas Iscariot裏切者の守護聖人)と同一視させることによって、彼の信用を傷つけることに決めた。教会は、彼の裏切りの資質に焦点を当てることによって、マヤの人々が彼への崇拜を放棄することを望んでいた。しかし、カトリック教会の見通しとは裏腹に、マヤの宗教では、世界

は正と負の両方のエネルギーで構成されていると信じられており、マシモンのダークサイドは、暗闇から光と新しい日がくるという彼らの理解に訴えるものだった。マシモンはグアテマラの最も人気のある聖人となり、もっとも尊敬される対象となった。

7 コフラディアとサン・シモン信仰のダイナミズム

7-1 コフラディアの社会的側面

ラテンアメリカの先住民社会の研究において、コフラディアのカルゴとムニシピオ(自治体)の(政治的な)カルゴとによる「政治宗教階梯制(またはカルゴ・システム)」は、先住民コミュニティの「閉鎖的共体的共同体(closed corporate community)」の統合システムとして注目されてきた。カルゴ・システムの研究の嚆矢は、アティトラン湖岸のパナハチェルを中心とするグアテマラ中西部高地での調査に基づくTaxによる研究である(Tax 1937)。彼の研究を引き継いで、WolfやNashは、カルゴ・システムが、個人の富を放出することにより、富の蓄積が妨げられ、コミュニティの成員間の同質化をもたらし、それが社会的統合を強化すると主張した(Wolf 1955, Nash 1958)。落合一泰も、その論を受け、高地マヤ社会の社会経済的統合のモデルを提示した(落合1980)。高地マヤ社会の生産性の低さとカルゴ・システムの経済、政治・行政、社会・宗教の諸機能の総合により「コミュニティの均質性と閉鎖性の維持」がもたらされるというものである。一方、Cancianは、メキシコのシナカンタンでの調査結果から、カルゴ・システムは住民間に富の平均化をもたらしておらず、階梯の高いレベルに達するのは少数の者だけであるから、むしろ社会を成層化するとし、社会の成層化がむしろ社会的統合をもたらすという論を展開した(Cancian 1965)。

筆者は、このコミュニティ成員間の均質化と成層化という対立するカルゴ・システムの機能を総合する論を展開した(稲村1980)。すなわち、威信経済と再分配経済の観点から、カルゴ・システムの2つの機能として、①経済的均質化、②社会的異質化、に注目し、人口規模と生産力が低いコミュニティにおいては①がより大きく働き、人口規模と生産力が高いコミュニティにおいては②がより強く働くため、異なる効果をもたらすというものである。

7-2 マム社会における社会と政治宗教階梯制の変容

小泉潤二は、1978～79年にグアテマラ高地のマムのコミュニティで現地調査を行ったが、その20年後に再び調査を実施し、その間の変化について論じている。それによれば、和平合意により先住民の権利が確認され、その影響でグアテマラにひろがった汎マヤ主義(先住民マヤ全体としてのアイデンティティを追求する政治活動)が中西部高地で展開されている(以下、小泉1999)。その影響で、先住民が民族衣装を身につ

けて活動する社会的な場が広がった。教育については、二言語教育が進展を見せている。スペイン語を身につけた後に退学するケースが多いものの、高等教育を受けて教師になる者や、共同体内でのエリート養成の道筋が形成された。

国外からの開発援助が大きく拡大し、学校や市場、保健所、道路などの整備が進んだ。こうした開発援助は、アフーマティブ・アクション（弱者優先政策）により、ラディーノと先住民の間のエスニック関係を複雑にしている面があるという。また、コーヒー栽培などの換金作物が増え、地域によってはアマポラ（ケシ）などの非合法の作物も広がった。

宗教に関しては、グアテマラでは、プロテスタントの普及が進んでいるが、とくに調査地のS共同体でその傾向が大きく、プロテスタントが過半数を占めるようになった。そのため、1970年代に機能していたカルゴ・システムのうち、コフラディアに相当するマヨルドモのカルゴが廃止になった。すなわち、政治宗教階梯制の宗教部分が消滅した。これは、正統的カトリックと福音主義プロテスタントの双方が、守護聖人に対する民俗カトリシズムの儀礼を攻撃し排斥したこと、また、宗教的役職に付帯する極端な儀礼的出費を嫌ったという背景があるという。

7-3 スニル村におけるコフラディアの変遷と軋轢—サン・シモンのコフラディア

スニルでは、プロテスタントの勢力拡大はそれほどではなく（約21%）、むしろ、カトリック教会（正統派）とコフラディア（慣習派）の対立が顕著な動きとなっている。Ixcaraguaが2006年にスニルで調査を行い、修士論文としてまとめた研究は、サン・シモンのコフラディアをめぐる宗教的対立を具体的に報告している（Ixcaragua 2006）。彼の研究から、スニルにおけるサン・シモンのコフラディアをめぐる軋轢について見てみよう。

グアテマラで最も古い先住民のコフラディアはカトリック教会によって16世紀半ばに設立された。先住民の間に正しいキリスト信仰を広め、教区の物質的な維持に貢献するためであった。遠隔地の教区では、先住民コミュニティにおいて独自の支配的な組織として急激に発展した。その地方行政への浸透は、植民地行政によって促進され公式化され、そこから、政治宗教的カルゴの階梯となり、行政と宗教の間の相互関係が生じた。政治宗教的階梯の権力の充実は相当なものであり、それは村の政治的コントロールだけでなく、同時に、規範的な組織の機能において、世界観のイデオロギーの分野もコントロールするようになった。

アニマス（サン・シモン）のコフラディアは、以前はサン・シモンへの訪問者が多くなかったため、収入が少なかった。その頃は、ムニシピオのアルカルデがコフラディアのアルカルデを選び、カルゴはだいたい3年続いた。次第に、サン・シモンの人気があがり、訪問者が多くなり、寄付金が増え、人気のコフラディ

アとなったため、カルゴの任期は一年だけとなり、他のコフラディアでより長くカルゴを務めた人が選ばれるようになった。

しかし、サン・シモン信仰は正統カトリックにとっては、正すべき誤った信仰の形態として捉えられ、歴代の司祭たちは、常に対抗してきたという。2006年、新たに赴任してきた司祭は、慣習的に行われてきた聖週間へのコフラディアの参加に関して異議を唱えた。

司祭は彼らに、サン・シモンをとるか教会をとるか、話し合っ、どちらかに決めるように言った。人々は「コフラディアは私たちの文化で、コフラディアは村人と教会に奉仕する、だから私たちはサン・シモンと共にとどまる」と決めた。

慣習派（Costumbrista）と呼ばれる村人たち、すなわちコフラディアの慣習と運営を守ってきた人々とカトリック正当派の間に亀裂が起こった。慣習派の次のような言説が紹介されている。

以前はコフラディアと教会は共同していた。コフラディアはミサを支払っていたが、今はコフラディアのミサをやらうともしない。以前はもっとよかった。今はどうだ。良くない。教会の人たちはすべてを変えている。以前、サン・シモンは、祭のときは、お金で協力した。聖週間の時には、彼らは聖行列の楽団の費用を支払った。しかし、今は、費用を賄う金が無いので、村人に金を頼んでいる。

スニルには、海外やグアテマラの様々な場所（とくに南海岸地方）からの、多様な階層の人々が、巡礼で、「守り神」としてサン・シモンを訪問する。興味や観光で来る人もいるが、これらの訪問者のほとんどは、守護をもとめる信者たちだ。ともかく、ほとんどの人は、お金や（食べ物、酒、装身具、服などの）物品を寄付として残す。これは、アニマスのコフラディアを潤すだけでなく、そのメンバー、さらに他のコフラディアの助けになり、その守護聖人の祭とその維持にとっても経済的に助けになり、コミュニティのための重要な財産の購入やサービスにも助けになる。鐘、キリストの服、教会の正面の床や垣根、ムニシピオの守護聖女、処女聖カタリーナのための毎年のコンサートの主催、水道、インフラの導入などに協力してきた。

8 おわりに

人びとは、病気の治癒、作物への祝福、呪いの除去、訴訟の勝訴などの願い事や、そして未来の占いのために、サン・シモン（マシモン）の下にやってくる。サン・シモンは、コフラディアというカトリック信徒組織の中に組み込まれながら、その信仰の中身はむしろマヤの伝統が継承されている。

本稿では、そのサン・シモン信仰の実際を紹介し、それがどのようにコフラディアに組み込まれているのか。また、その変化について述べた。最初に調査を行

った時から約半世紀を経て、グアテマラは、近代化やグローバル化によって、その景観は大きく変貌したが、信仰は変わらない部分が多いようである。しかし、一方で、その信仰は、社会の多様なアクターの間でのせめぎあいとゆらぎのなかにあることも垣間見えた。

サン・シモン信仰は、先住民にとって、ラディーノや政府との紛争に対処するのにも効果的な力を持つ聖人として知られるようになったという (Smith 2006)。また、ラディーノと先住民との境界を越え、国境をも越えて、サン・シモンの人気は広がっているようである。暴力と内戦の過程がどのような影響を与えたのだろうか。生活の近代化とサン・シモン信仰はどのような関連性があるのだろうか。

一方で、古代マヤからの連続性は明らかであるが、実際にどのような内容の繋がりがいいのか、またカトリックとのシンクレティズムはどのように起こったのか。考古学の最新の研究や、文献の検討は不十分である。現地調査もこれからである。今回の研究は、そのための基礎研究という位置づけである。今後の研究で、その継続性と変容について、さらに明らかにしていきたい。

参考文献

- 池田光穂2020『暴力の政治民族誌—現代マヤ先住民の経験と記憶』大阪大学出版会
- 稲村哲也1980「インディオ社会における聖者の祭とカルゴ・システム—グアテマラとペルーの事例から—」『ラテンアメリカ研究』10:65-102
- 落合一泰1980「マヤ高地コミュニティの社会経済的構造とその変容」『ラテンアメリカ研究』10:35-64
- 小泉潤二1996「現代マヤの衣装と政治—グアテマラの場合—」『大阪大学人間科学部紀要』22:319-340
- 小泉潤二1999「グアテマラ北西部の文化とシステムのダイナミクス」『大阪大学人間科学部紀要』25:101-118
- 小林致広2018「薪になる木の豊かな場所」桜井三枝子編『グアテマラを知るための67章【第2版】』明石書店、pp.16-20.
- 桜井三枝子1998『祝祭の民族誌 マヤ村落見聞録』(社)全国日本学会
- 桜井三枝子(編)2018『グアテマラを知るための67章【第2版】』明石書店
- 佐藤仁美2019「Guatemalaにけるマヤ先住民の空間表現へのアプローチ—Ixil地方を中心に—」『放送大学研究年報』36:25-31
- 佐藤仁美2020「表現された色と形—Santiago Atitlánの子どもたちを中心に—」『放送大学研究年報』37:45-51
- 実松克義2000『マヤ文明 聖なる時間の書』現代書林
- 本谷裕子2012「グアテマラ高地マヤ女性の織りと装いの文化的意義を問う—レジリアンスを視座に—」『第四紀研

- 究』51(4):207-214
- 歴史的記憶回復プロジェクト(編)2000『グアテマラ 虐殺の記憶』岩波書店
- Bunzel, Ruth 1952 (third printing 1967) *Chichicastenango: A Guatemalan Village*. University of Washington Press.
- Cancian, Frank 1965 *Economics and Prestige in Maya Community: The Religios Cargo System in Zinacantan*. Stanford University Press.
- Esquivel, José 2018 Analfabetismo y su relación con el desarrollo social de los seres humanos, *Revista Científica del SEP* 1:81-91
- Knowlton, Timothy 2012 Ethnicity, God Concept, and the Indigenization of the Guatemalan Popular Saint. *Journal of Anthropological Research* 68:223-247
- Larez Guitz, Ismael 2008 *Municipio de Zunil, Departamento de Quetzaltenango "Administración de Riesgo"*, Universidad de San Carlos de Guatemala, Guatemala.
- Nash, Manning 1958 *Machine Age Maya: The Industrialization of a Guatemalan Community*. American Anthropological Association, Memoir 87.
- Nash, Manning 1967 The Social Context of Economic Choice in a small Society. In Dalton, G. ed. *Tribal and Peasant Economies: Readings in Economic Anthropology*. University of Texas Press.
- Smith, J. S. 2006 The Highlands of Contemporary Guatemala. *Focus on Geography* 49(1):16-26
- Tax, Sol 1937 The Municipios of the Midwestern Highland of Guatemala. *American Anthropologist* 39:423-444
- Whetten, Nathan L. 1961 *Guatemala. The Land and the People*. Yale University Press.
- Wolf, Eric R. 1955 Types of Latin American Peasantry: Preliminary Discussion. *American Anthropologist* 57:452-471
- Instituto Nacional de Estadística 2018 *Resultados del Censo 2018* (2020年11月1日)
<https://www.censopoblacion.gt/explorador>

謝辞

本稿は、文部科学省・科学研究費補助金・新学術領域研究(領域研究提案型)「出ユーラシアの統合的人類史学—文明創出メカニズムの解明」総括班(JP19H05731、2019~2023年度、代表松本直子)及びB01班計画研究「民族誌調査に基づくニッチ構成メカニズムの解明」(JP19H05735、代表大西秀之)の研究成果の一部である。この調査の遂行にあたっては、現地で多くの方々の協力を得ている。個々のお名前を記述することはできないが、衷心より謝意を表したい。

(2020年11月4日受理)



巻末カラー① サンティアゴ・アティトランの教会の内部。壁側に、各コフラディアの聖人像が安置されている。



巻末カラー④ スニル村の市場。かつては露店であったが、立派な建物が建てられた。近代化の象徴のひとつである。



巻末カラー② サンティアゴ・アティトランのマシモンの儀礼。健康と仕事の成功を祈願してもらった。



巻末カラー⑤ サン・シモン前で、チマン（祈祷師）が依頼者の体を神聖な水で清める。



巻末カラー③ 現在のスニル村（ドローンにより撮影）。かつての農村は、45年間で、すっかり市街地に変貌した。



巻末カラー⑥ サン・シモンへの祈祷のプロセスで、依頼者がサン・シモンの口に蒸留酒を注ぐ。